

麦藁帽子

堀辰雄

青空文庫

私は十五だった。そしてお前は十三だった。

私はお前の兄たちと、うまごやし 苜宿の白い花の密生した原っぱで、

ベエスポオルの練習をしていた。お前は、その小さな弟と一しよに、遠くの方で、私たちの練習を見ていた。その白い花を摘んでは、それで花環はなわをつくりながら。飛球があがる。私は一所懸命に走る。球たまがグロオブさわに触る。足が滑すべる。私の体がもんどり打って、原っぱから、田圃たんぼの中へ墜落する。私はどぶ鼠ねずみになる。

私は近所の農家の井戸端いどばたに連れられて行く。私はそこで素っ裸かになる。お前の名が呼ばれる。お前は両手で大事そうに花環をささげながら、駈かけつけてくる。素っ裸かになることは、何んと

物の見方を一変させるのだ！　いままで小娘だとばかり思っていたお前が、突然、一人前の娘となつて私の眼の前にあらわれる。素つ裸かの私は、急にまごまごして、やつと私のグロオブで私のセックス性をかくしている。

其処に、そこは羞しはそんな私とお前を、二人だけ残して、みんなはまたボオルの練習をしに行つてしまふ。そして、私のためにお前が泥だらけになつたズボンを洗せんたく濯してくれている間、私はてれかくしに、わざと道化けて、お前のために持つてやっている花環を、私の帽子の代りに、かぶつて見せたりする。そして、まるで古代の彫刻のように、そこに不動の姿勢で、私は突つ立っている。顔を真っ赤にして……

夏休みが来た。

寄宿舎から、その春、入寮したばかりの若い生徒たちは、一群の熊蜂くまばちのように、うなりながら、巣離れていった。めいめいの野薔薇のばらを目ざして……

しかし、私はどうしよう！ 私には私の田舎いなかがない。私の生れた家は都会のまん中であつたから。おまけに私は一人息子むすこで、弱虫だつた。それで、まだ両親の許もとをはなれて、ひとりで旅行をするなんていう芸当も出来ない。だが、今度は、いままでとは事情

がすこし違って、ひとつ上の学校に入っただので、この夏休みには、こんな休暇の宿題があつたのだ。田舎へ行つて一人の少女を見つけてくること。

その田舎へひとりでは行くことが出来ずに、私は都会のまん中で、一つの奇蹟きせきの起るのを待っていた。それは無駄むだではなかった。C県の或る海岸にひと夏を送りに行つていた、お前の兄のところから、思いがけない招待の手紙が届いたのだつた。

おお、私のなつかしい幼友達よ！ 私は私の思い出の中を手探りする。真っ白な運動服を着た、二人とも私よりすこし年上の、お前の兄たちの姿が、先まず浮ぶ。毎日のように、私は彼等らとベエスボオルの練習をした。或る日、私は田圃に落ちた。花環を手に

していたお前の傍そばで、私は裸かにさせられた。私は真つ赤になった。……やがて彼等は、二人とも地方の高等学校へ行つてしまつた。もうかれこれ三四年になる。それからあんまり彼等とも遊ぶ機会がなくなつた。その間、私はお前とだけは、屢しばしば々、町の中ですれちがつた。何にも口をきかないで、ただ顔を赧あからめながら、お時宜じぎをしあつた。お前は女学校の制服をつけていた。すれちがいざま、お前の小さな靴の鳴るのを私は聞いた……

私はその海岸行を両親にせがんだ。そしてやつと一週間の逗とまり留ゆうを許された。私は海水着やグロオブで一ぱいになったバスケットを重そうにぶらさげて、心臓をどきどきさせながら、出発した。

それはT……という名のごく小さな村だった。お前たちは或る農家の、ささやかな、いろいろな草花で縁へりをとられた離れを借りて、暮らしていた。私が到着したとき、お前たちは海岸に行っていた。あとにはお前の母と私のあまりよく知らないお前の姉とが、二人きりで、留守番をしていた。

私は海岸へ行く道順を教わると、すぐ裸足はだしになつて、松林の中の、その小径こみちを飛んで行つた。焼けた砂が、まるでパンの焦げるような好い匂においがした。

海岸には、光線がぎつしりと充填つまつて、まぶしくつて、何にも見えない位だった。そしてその光線の中へは、一種の妖精ようせいにで

もならなければ、はい這入れないように見えた。私は盲のように、手さぐりしながら、その中へおずおずと、足を踏み入れていった。

小さな子供たちがせつせと砂の中に生埋めになっている、一人の半裸体の少女が、ぼんやり私の目にはいる。お前かしらと思って、私は近づきかける。……すると大きな海水帽のかげから、私の見知らない、黒い、小さな顔が、ちらりとこちらをのぞく。そしてまた知らん顔をして、元のように、すっぽりとその小さな顔を海水帽の中に埋める。……それが私の足を動けなくさせる。

私は流砂に足をとられながら、海の方へ出たらめに叫ぶ。「ハロオ！」……と、まぶしくて私にはちつとも見えない、その海の中から、それにこた応えて、「ハロオ！　ハロオ！」

私はいそいで着物をぬぐ。そして海水着だけになって、盲のうに、その声のする方へ、飛び込もうと身構える。

その瞬間、私のすぐ足許^{あしもと}からも、「ハロオ！……」——私は振りむく。さっきの少女が、砂の中から半身を出してにつこりと笑っているのが、今度は、私にもよく見える。

「なあんだ、君だったの？」

「おわかりになりませんでしたこと？」

海水着がどうも怪しい。私がそれ一枚きりになるや否や、私は妖精の仲間入りをする。私は身軽になって、いままでちつとも見えなかつたものが忽ち見え出す……

都会では難^{むずか}しいものに見える愛の方法も、至極簡単なものでいいことを会得させる田舎暮らしよ！ 一人の少女の気に入るためには、かの女の家族の様^{スタイル}式を呑み込んでしまふが好い。そしてそれは、お前の家族と一しよに暮らしているおかげで、私には容易だった。お前の一番気に入っている若者は、お前の兄たちであることを、私は簡単に会得する。彼等はスポオツが大好きだった。だから、私も出来るだけ、スポオティヴになろうとした。それから彼等は、お前に親密で、同時に意地悪だった。私も彼等に見習って、お前をば、あらゆる遊戯からボイコットした。

お前がお前の小さな弟と、波打ちぎわで遊び戯れている間、私はお前の気に入りたいために、お前の兄たちとばかり、沖の方で

泳いでいた。

沖の方で泳いでいると、水があんまり綺麗な^{きれ}いので、私たちの泳いでいる影が、魚のかげと一しよに、水底に映った。そのおかげで、空にそれとよく似た雲がうかんでいる時は、それもまた、私たちの空にうつる影ではないかとさえ思えてくる。……

私たちの田舎^{せなか}ずまいは、一銭銅貨の表と裏とのように、いろんな家畜小屋と脊中^{せなか}合わせだった。ときどき家畜らが交尾をした。そのための悲鳴が私たちのところまで聞えてきた。裏木戸を出ると、そこに小さな牧場があった。いつも牛の夫婦が草をたべてい

た。夕方になると、彼等は何処^{どこ}へともなく姿を消す。そのあとで、私たちはいつもキャッチボールをした。するとお前は、或る時はお前の姉と、或る時はお前の小さな弟と、其処まで遊びに出てきた。いつだったかのように、遠くで花を摘んだり、お前の習ったばかりの讚美歌^{さんびか}を唱^{うた}つたりしながら。ときどきお前がつかえると、お前の姉が小声でそれを続けてやった。——まだ八つにしかならない、お前の小さな弟は、始終お前のそばに付きつきりだった。彼は私たちの仲間入りをするには、あんまり小さ過ぎた。そんな小さな弟に毎日一ぺんずつ接吻^{せつぶん}をしてやるのが、お前の日課の一つだった。「今日はまだ一ぺんもしてあげなかったのね……」そう云って、お前はその小さな弟を引きよせて、私たちのいる前

で、平気で彼と接吻をする。

私はいつまでも投球のモオションを続けながら、それを横目で見ている。

その牧場のむこうは麦畑だった。その麦畑と麦畑の間を、小さな川が流れていた。よくそこへ釣りをしに行つた。お前は私たちの後から、^{もちぎお}鵜竿を肩にかついだ小さな弟と一しよに、^{びく}魚籠をぶらさげて、ついてきた。私は^{みみず}蚯蚓がこわいので、お前の兄たちにそれを釣針につけて貰^{もら}った。しかし私はすぐそれを食われてしまう。すると、しまいには彼等はそれを面倒くさがつて、そばで見ているお前に、その役を押しつける。お前は私みたいに蚯蚓をこわがらないので。お前はそれを私の釣針につけてくれるために、

私の方へ身をかがめる。お前はよそゆきの、赤いさくらんぼの飾りのついた、麦藁^{むぎわら}帽子をかぶっている。そのしなやかな帽子の縁^{へり}が、私の頬^{ほお}をそつと撫^なでる。私はお前に気どられぬように深い呼吸をする。しかしお前はなんの匂いもしない。ただ麦藁帽子の、かすかに焦げる匂いがするきりで。……私は物足りなくて、なんだかお前にだまかされているような気さえする。

まだあんまり開けていない、そのT村には、避暑客らしいものは、私たちの他には、一組もない位だった。私たちはその小さな村の人気者だった。海岸などにいると、いつも私たちの周り^{まわ}には人だかりがした程に。そうして村の善良な人々は、私のことを、

お前の兄だと間違えていた。それが私をますます有頂天にさせた。そればかりでなしに、私の母みたいな、子供のうるさがるような愛し方をしないお前の母は、私をもその子供並みにかなり無^{むとん}頓着^{じやく}に取り扱った。それが私に、自分は彼女にも気に入っているのだと信じさせた。

予定の一週間はすでに過ぎていた。しかし私は都会へ帰ろうとはしなかった。

ああ、私はお前の兄たちに見習って、お前に意地悪ばかりしてさえいれば、こんな失敗はしなかったろうに！ ふと私に魔がさした。私は一度でもいいから、お前と二人きりで、遊んでみた

てしようがなくなつた。

「あなた、テニス出来て？」或る日、お前が私に云つた。

「ああ、すこし位なら……」

「じゃ、私と丁度いい位かしら？……ちよつと、やってみない」

「だってラケットはなし、一体何処でするのさ」

「小学校へ行けば、みんな貸してくれるわ」

それがお前と二人きりで遊ぶには、もつてこいの機会に見えたので、私はそれを逃がすまいとして、すぐ分るような嘘うそをついた。

私はまだ一度もラケットを手にしたことなんか無かつたのだ。しかし少女の相手ぐらいなら、そんなものはすぐ出来そうに思えた。お前の兄たちがいつも、テニスなんか！と軽蔑けいべつしていたから。

しかし彼等も、私たちに誘われると、一しよに小学校へ行つた。そこへ行くと、砲丸投げが出来るので。

小学校の庭には、きょうちくとう夾竹桃が花ざかりだった。彼等は、すぐその木蔭で、こかげ砲丸投げをやり出した。私とお前とは、其処からすこし離して、白墨で線を描いて、ネットを張つて、それからラケットを握つて、まじめ真面目くさつて向い合つた。が、やってみると、思つたよりか、お前の打つ球が強いので、私の受けかえす球は、大概ネットにひつかかつてしまった。五六度やると、お前は怒つたような顔をして、ラケットを投げ出した。

「もう止よみましょう」

「どうしてさ？」私はすこしおどおどしていた。

「だって、ちつとも本気でなさらないんですもの……つまらないわ」

そうして見ると、私の嘘は看破みやぶられたのではなかった。が、お前のそういう誤解が、私を苦しめたのは、それ以上だった。むしろ、そんな薄情な奴やつになるより、嘘つきになった方がましだ。

私は頬をふくらませて、何も云わずに、汗を拭ふいていた。どうも、さつきから、あの夾竹桃の薄紅うすあかい花が目ざわりでいけない。

この二三日、お前は、鼠色の、だぶだぶな海水着をきている。

お前はそれを着るのをいやがっていた。いままでのお前の海水着には、どうしたのか、胸のところにな大きな心臓型の孔あながあいてしまったのだ。そこでお前は間に合わせに、あんまり海へはいらな

い、お前の姉の奴を、借りて着ているのだ。この村では、新しい海水着などは手に入らなかった。一里ばかり向うの、駅のある町まで買いに行かなければ。——そこで或る日、私はテニスの失敗をつぐなう積りで、自分から、その使者を申し出た。

「何処かで自転車を買ってきてくれるかしら？」

「理髪店のならば……」

私は大きな海水帽をかぶって、炎天の下を、その理髪店の古ぼけた自転車にまたが跨って、出発した。

その町で、私は数軒の洋品店を捜し廻った。少女用の海水着の買物がなんと私の心を奪ったことか！ 私はお前に似合いそうな海水着を、とつくに見つけてしまってから、私はただ私自身を

満足させるために、いつまでも、それを選んでいるように見せかけた。それから私は郵便局で、私の母へ宛てて電報を打った。

「ボンボンオクレ」

そうして私は汗だくになって、決勝点に近づくときの選手の真似をして、死にもものぐるいの恰好で、ペダルを踏みながら、村に帰ってきた。

それから二三日が過ぎた。或る日のこと、海岸で、私たちは寝そべりながら、順番に、お互を砂の中に埋めっこしていた。私の番だった。私は全身を生埋めにされて、やっと、私の顔だけを、砂の中から出していた。お前がその細部^{デテエル}を仕上げていた。私は

お前のするがままになりながら、さつきから、向うの大きな松の木の下に、私たちの方を見ては、笑いながら話し合っている二人の婦人のいるのを、ぼんやり認めていた。そのうちの海水帽をかぶった方は、お前の母らしかった。もう一人の方は、この村では、つい見かけたことのない婦人に見えた。黒いパラソルをさしていた。

「あら、たつちちゃんのお母様だわ」お前は、海水着の砂を払いながら、起き上った。

「ふん……」私は気のなさそうな返事をした。そうして皆が起き上ったのに、私一人だけ、いつまでも砂の中に埋まっていた。私は心臓をどきどきさせていた。私の隠し立てが、今にもばれそう

なので。そうしてそれが、砂の中から浮んでいる私の顔を、とても変^{へんてこ}艇にさせていそうだった。私はいっそのこと、そんな顔も砂の中に埋めてしまいたかった！ 何故^{なぜ}なら、私は田舎から、私の母へ宛てて、わざと悲しそうな手紙ばかり送っていた。その方が彼女には気に入るだろうと思つて……。彼女から遠くに離れているばかりに、私がそんなにも悲しそうにしているのを見て、私の母は感動して、私を連れ戻しに来たのかしら？……それなのに、私は、彼女に隠し立てをしていた一人の少女のために、今、こんなにも幸福の中に生埋めにされている！

おっと、待てよ。今のさっきの様子では、お前は私の母をなんだか知っていたようだぞ！ そんな筈^{はず}じゃなかったのに？……と、

私は砂の中からこつそりとみんなの様子をうかがっている。どうやら、私の母とお前たちの家族とは、ずっと前からの知合らしい。私にはどうしてもそれが分らない。これでは、欺こうとしていた私の方が、反対に、私の母に裏を搔^かかれていたようなものだ。突然、私は砂を払いのけながら、起き上る。今度はこっちで、あべこべに、母の隠し立てを見つけてやるからいい！……そこで、私はお前にそつと捜^{さぐ}りを入れてみる。皆のしんがりになって、家の方へ引きあげて行きながら。……

「どうして僕のお母さんを知っていたの？」「だってあなたのお母様は運動会るとき何時^{いつ}もいらつしつてたじゃないの？　そうして私のお母様といつも並んで見ていらしたわ」私はそんなこと

はまるつきり知らなかった。何故なら、そんな小学生の時分から、私はみんなの前では、私の母から話しかけられるのさえ、ひどく羞かしが^{はず}つていたから。そうして私は私の母から隠れるようにばかりしていたから。……

——そして今もそうだった。井戸端で、みんなが身体^{からだ}を洗ってしまつてからも、私は何時までも、そこに愚図々々していた。ただ、私の母から隠れていたいばかりに。……井戸端にしゃがんでいると、私の脊くらい伸びたダリアのおかげで、離れの方からはこつちがちつとも見えなかった。それでいて、向うの話し声は手にとるように聞えてくる。私のボンボンの電報のことが話された。みんなが、お前までがどつと笑った。私はてれ臭そうに、耳には

さんでいた巻煙草をふかし出した。私は何度もその煙に噎むせた。

そして、それが私の羞しゆう恥うちを誤魔化ごまかした。

誰かが、私の方に近づいてくる足音がした。それはお前だった。
「何してんの？……もうお母様がお帰りなさるから、早くいらつ
しやいって？」

「こいつを一服したら……」

「まあ！」お前は私と目と目を合わせて、ちらりと笑った。その
瞬間、私たちにはなんだか離れの方が急にひっそりしたような気が
した。

せつかくボンボンやら何やらを持って来てやったのに、自分には
ろくすっぽ口もきいてくれない息子の方を、その母は俤くるまの上か

ら、何度もふりかえりながら、帰って行つた。それがやつぱり彼女の本当の息子だったのかどうかを確かめでもするように。そういう母の姿がすっかり見えなくなってしまうと、息子の方ではやつと、しかし自分自身にも聞かれたくないように、口のうちに、「お母さん、ごめんなさいね」とひとりごちた。

海は日毎ひごとに荒模様になつて行つた。毎朝、渚なぎさに打ち上げられる漂流物の量が、急に増え出ふした。私たちは海へはいると、すぐ水く母らげに刺された。私たちはそんな日は、海で泳がずに、渚に散らばっている、さまざまな綺麗な貝殻を、遠くまで採集しに行つた。その貝殻がもうだいたい溜たまつた。

出発の数日前のこと、私がキャッチボオルで汚よごした手を井戸端へ洗いに行こうとすると、そこでお前がお前の母に叱しかられていた。私はそれが私の事に関しているような気がした。それを立聞きするにはすこし勇気を要した。気の小さな私はすっかりしよげて、其処から引き返した。——私はあとでもって、一人でこつそりと、その井戸端に行つてみた。そしてその隅すみつこに、私の海水着が丸められたまま、打棄うちすてられてあるのを見た。私ははつと思つた。いつもなら私の海水着をそこへ置いておくと、兄たちのと一緒に、お前がゆすいで乾ほして置いてくれるのだ。そのことでお前はさつきお前の母に叱られていたものと見える。私はその海水着を、音の立たないように、そつと水をしばって、いつものように竿さおにか

けておいた。

翌朝、私はその砂でざらざらする海水着をつけて、何食わぬ顔をしていた。気のせいか、お前はすこし鬱^{ふさ}んでいるように見えた。

とうとう休暇が終った。

私はお前の家族たちと一しよに帰った。汽車の中には、避暑地がえりの真つ黒な顔をした少女たちが、何人も乗っていた。お前はその少女たちの一人一人と色の黒さを比較した。そうしてお前が誰よりも一番色が黒いので、お前は得意そうだった。私は少しがっかりした。だが、お前がちよつと斜めに冠^{かぶ}っている、赤いさくらんぼの飾りのついたお前の麦藁^{むぎわら}帽子は、お前のそんな黒い

あどけない顔に、大層よく似合っていた。だから、私はそのことをそんなに悲しみはしなかった。もしも汽車の中の私がいかにも悲しそうな様子に見えたと言うなら、それは私が自分の宿題の最後の方がすこし不出来なことを考えているせいだったのだ。私はふと、この次ぎの駅に着いたら、サンドウィッチでも買おうかと、お前の母がお前の兄たちに相談しているのを聞いた。私はかなり神経質になっていた。そして自分だけがそれからのけ者にされないかと心配した。その次ぎの駅に着くと、私は真先きにプラットフォームに飛び下りて、一人でサンドウィッチを沢山買って来た。そして私はそれをお前たちに分けてやった。

秋の学期が始まった。お前の兄たちは地方の学校へ帰って行った。私は再び寄宿舎にはいった。

私は日曜日ごとに自分の家に帰った。そして私の母に会った。この頃から私と母との関係は、いくらかずつ悲劇的な性質を帯びだした。愛し合っているものが始終均衡を得ていようがためには、両方が一緒になって成長して行くことが必要だ。が、それは母子のような場合には難しいのだ。

寄宿舎では、私は母のことなどは殆んど^{ほと}考えなかった。私は母がいっまでも前のままの母であることを信じていられたから。し

かし、その間、母の方では、私のことで始終不安になっていた。その一週間のうちに、急に私が成長して、全く彼女の見知らない青年になってしまいはせぬかと気づかつて。で、私が寄宿舎から帰って行くと、彼女は私の中に、昔ながらの子供らしさを見つけるまでは、ちつとも落着かなかった。そして彼女はそれを人工培養した。

もし私がそんな子供らしさの似合わない年頃になっても、まだ、そんな子供らしさを持ち合わせているために不幸な人間になるとしたら、お母さん、それは全くあなたのせいです。……

或る日曜日、私が寄宿舎から帰ってみると、母はいつものような丸まるまげ髷に結っていないで、見なれない束髪に結っていた。私は

それを見ながら、すこし気づかわしそうに母に云った。

「お母さんには、そんな髪、ちつとも似合わないや……」

それつきり、私の母はそんな髪の結い方をしなかった。

それなのに、私は寄宿舎では、毎日、大人になるための練習をした。私は母の云うことも訊きかないで、髪の毛を伸ばしはじめた。それでもって私の子供らしさが隠せでもするかのように。そうして私は母のことを強しいて忘れようとして、私の嫌きらいな煙草のけむりでわざと自分を苦しめた。私の同室者たちのところへは、ときおり女文字の匿とくめい名の手紙が届いた。皆が彼等らのまわりへ環わになった。彼等は代る代るに、顔を赧あからめて、嘘うそを半分まぜながら、

その匿名の少女のことを話した。私も彼等の仲間入りがしたくて、毎日、やきもきしながら、ことによるとお前が匿名で私によすかも知れない手紙、そんな来る宛あてのない手紙を待っていた。

或る日、私が教室から帰つてくると、私の机の上に女もちの小さな封筒が置かれてあつた。私が心臓をどきどきさせながら、それを手にとつて見ると、それはお前の姉からの手紙だつた。私がこの間、その返事を受取りたいばかりに、女学校を卒業してからも英吉利語イギリスの勉強をしていたお前の姉に、洋書を二三冊送つてやったので、そのお礼だつた。しかし真面目まじめなお前の姉は、誰にもすぐ分るように、自分の名前を書いてよこした。それがみんなの好奇心をそそらなかつたものと見える。私はその手紙につい

てほんのあつさりと^{からか}揶揄われたきりだった。

それから^{しばしば}屢々、私はそんな手紙でもいいから受取りたいばかりに、お前の姉にいろんな本を送ってやった。するとお前の姉はきつと私に返事をくれた。ああ、その手紙に^{きちようめん}几帳面な署名がなかったら、どんなによかつたろうに！……

匿名の手紙は、いつまでたつても、私のところへは来なかつた。

そのうちに、夏が^{ひとまわ}一周りしてやってきた。

私はお前たちに招待されたので、再びT村を訪れた。私は、去年からそっくりそのままの、^{きれ}綺麗な、小ぢんまりした村を、それからその村のどの隅々^{すみずみ}にも一ぱいに充満している、私たちの去

年の夏遊びの思い出を、再び見いだした。しかし私自身はと云えば、去年とはいくらか變つて、ことにお前の家族たちの私に対する態度には、かなり神経質になっていた。

それにしてもこの一年足らずのうちに、お前はまあなんとすっかり變つてしまったのだ！ 顔だちも、見ちがえるほどメランコリックになつてしまつてゐる。そしてもう去年のように親しげに私に口をきいてはくれないのだ。昔のお前をあんなにもあどけなく見せていた、赤いさくらんぼのついた麦藁帽子もかぶらずに、若い女のように、髪を葡萄ぶどうの房ふさのような恰好かつこうに編んでいた。鼠ね色ずみいろの海水着をきて海岸に出てくることはあつても、去年のようには私たちに仲間はずれにされながらも、私たちにうるさくつき

まとうようなこともなく、小さな弟のほんの遊び相手をしている位のものであった。私はなんだかお前に裏切られたような気がしてならなかった。

日曜日ごとに、お前はお前の姉と連れ立って、村の小さな教会へ行くようになった。そう云えば、お前はどうもお前の姉に急に似て来だしたように見える。お前の姉は私と同じ年だった。いつも髪の毛を洗ったあのような、いやな臭いにおをさせていた。しかしかにも氣立てのやさしい、つつましそうな様子をしていた。そして一日中、英吉利語を勉強していた。

そういう姉の影響が、お前が年頃になるにつれて、突然、それまでの兄たちの影響と入れ代ったのであろうか？ それにしても

お前が、何かにつけて、私を避けようとするように見えるのは何故なのだ？　それが私には分らない。ひよつとしたら、あの姉がひそかに私のことを思つてでもいて、そしてそれをお前が知つていて、お前が自ら犠牲になろうとしているのではないのかしら？　そんなことまで考えて、私はふと、お前の姉と二三度やりとりした手紙のことを、顔を赧らめながら、思い出す……

お前たちが教会にいと、よく村の若者どもが通りすがりに口ぎたなく罵^{のの}つて行くといつては、お前たちが厭^{いや}がつていた。

或る日曜日、お前たちが讃美歌^{さんびか}の練習をしている間、私はお前の兄たちと、その教会の隅っこに隠れながら、バットをめいめい手にして、その村の悪者どもを待伏せていた。彼等は何も知らず

に、何時いつものように、白い齒をむき出しながら、お前たちをからかいに来た。お前の兄たちがだしぬけに窓をあけて、恐ろしい権けん幕まくで、彼等を唖鳴どなりつけた。私もその真似まねをした。……不意打ちをくらった、彼等は、あわてふためきながら、一目散に逃げて行つた。

私はまるで一人で彼等を追い返しでもしたかのように、得意だった。私はお前からの褒美ほうびを欲しがるように、お前の方を振り向いた。すると、一人の血色の悪い、痩せやこけた青年が、お前と並んで、肩と肩とをくつつけるようにして、立っているのを私は認めた。彼はもの怖おじたような目つきで、私たちの方を見ていた。私はなんだか胸さわぎがしだした。

私はその青年に紹介された。私はわざと冷淡を装うて、ちよつと頭を下げたきりだった。

彼はその村の呉服屋の息子^{むすこ}だった。彼は病氣のために中学校を途中で止^よして、こんな田舎^{いなか}に引籠^{ひきこも}つて、講義録などをたよりに独学していた。そうして彼よりずっと年下の私に、私の学校の様子などを、何かと聞きたがつた。

その青年がお前の兄たちよりも私に好意を寄せているらしいことは、私はすぐ見てとつたが、私の方では、どうも彼があんまり好きになれなかった。もし彼が私の競争者として現われたのでなかったならば、私は彼には見向きもしなかっただろう。が、彼がお前の氣に入っているらしいことに、誰よりも早く氣がついたの

も、この私であつた。

その青年の出現が、薬品のように私を若返らせた。この頃すこし悲しそうにばかりしていた私は、再び元のような快活そうな少年になつて、お前の兄たちと泳いだり、キャッチボールをし出した。実はそうすることが、自分の苦痛を忘れさせるためであるのを、自分でもよく理解しながら。今年九つになつたお前の小さな弟も、この頃は私達の仲間入りをし出した。そして彼までが私達に見習つて、お前をボイコットした。それが一本の大きな松の木の下に、お前を置いてきぼりにさせた。その青年といつも二人つきりに！

私は、その大きな松の木かげに、お前たちを、ポオルとヴィル

ジニイのように残したまんま、或る日、ひとり先きに、その村を立ち去った。

私は出発の二三日前は、一人で特別にはしやぎ廻った。私が居なくなつたあとは、お前たちの田舎暮らしはどんなに寂しいものになるかを、出来るだけお前たちに知らせたいと云う愚かな考えから。……そうしてそのために私はへとへとに疲れて、こつそりと泣きながら、出発した。

秋になつてから、その青年が突然、私に長い手紙をよこした。私はその手紙を読みながら、^{ふく}膨れつ^{つら}面をした。その手紙の終りの方には、お前が^{くるま}出発するとき、俥の上から、彼の方を見つめなが

ら、今にも泣き出しそうな顔をしたことが、まるで田園小説のエピログのように書かれてあったから。しかし、私はその小説の感傷的な主人公たちをこっそり羨うらやましがった。だが、何んだって彼は私になんかお前への恋を打明けたんだろう？ それともそれは私への挑戦状のつもりだったのかしら？ そうとすれば、その手紙は確かに効果的だった。

その手紙が私に最後の打撃を与えた。私は苦しがつた。が、その苦しみが私をたまらなく魅したほど、その時分はまだ私も子供だった。私は好んでお前を諦あきらめた。

私はその時分から、空腹者のようにががつと、詩や小説を読み出した。私はあらゆるスポオツから遠ざかった。私は見ちがえ

るようにメランコリックな少年になった。私の母が漸く^{ようや}それを心配しだした。彼女は私の心の中をそれとなく^{さぐ}捜る。そしてそこに二人の少女の影響を見つける。が、ああ、母の来るのは何時もあんまり遅すぎる！

私は或る日、突然、私のはいることになっている医科を止めて、文科にはいりたいことを母に訴えた。母はそれを聞きながら、ただ、^{あつけ}呆氣にとられていた。

それがその秋の最後の日かと思われるような、或る日のことだった。私は或る友人と学校の裏の細い坂道を上って行った、その時、私は坂の上から、秋の日を浴びながら、二人づれの女学生が

下りてくるのを認めた。私たちは空気のようにすれちがった。その一人はどうもお前らしかった。すれちがいざま、私はふとその少女の無難作に編んだ髪に目をやった。それが秋の日にかすかに^{にお}匂った。私はそのかすかな日の匂いに、いつかの麦藁帽子の匂いを思い出した。私はひどく息をはずませた。

「どうしたんだい？」

「何、ちよつと知っている人のような気がしたものだから……しかし、矢張り、ちがっていた」

次ぎの夏休みには、私は、そのすこし前から知合になった、一人の有名な詩人に連れられて、或る高原へ行つた。

その高原へ夏ごとに集まつてくる避暑客の大部分は、外国人か、上流社会の人達ばかりだった。ホテルのテラスにはいつも外国人たちが英字新聞を読んだり、チェスをしていた。落葉松からまつの林の中を歩いていると、突然背後から馬の足音がしたりした。テニスコートの附近は、毎日賑にぎやかで、まるで戸外舞踏会が催されているようだった。そのすぐ裏の教会からはピアノの音が絶えず聞えて……

毎年の夏をその高原で暮らすその詩人は、そこで多くの少女たちとも知合らしかった。私はその詩人に通りすがりにお時宜じぎをし

てゆく、幾たりかの少女のうちの一人が、いつか私の恋人になるであろうことを、ひそかに夢みた。そしてその夢を実現させるためには、私も早く有名な詩人になるより他^{ほか}はないと思ったりした。

或る日のことだった。私はいつものようにその詩人と並んで、

その町の^{メエン・ストリート}本通りを散歩していた。そのとき向うから、或い

はラケットを持ったり、或いは自転車を両手で押しながら、半ダ
アスばかりの少女たちがががやや話しながら、私たちの方へやっ
てくるのに出会った。それらの少女たちはちよつと立ち止まって、
私たちのために道を開^あけてくれながら、そうしてそのうちの幾た
りかは私と一緒にいる詩人にお時宜をした。彼は何か彼女たちと
しばらく立ち話をしていた。……私はその時はもう、われにもな

く其^{そこ}処から数歩離れたところにまで行っていた。そうしてそこに立ち止まったまま、今にもその詩人が私の名を呼んで、その少女たちに紹介してくれやしないかという期待に胸をはずませながら、しかし何食わぬ顔をして、鶏肉屋の店先きに飼われている七面鳥を見つめていた……

しかし少女たちは私の方なんぞは振り向きもしないで、再びがやがやと話しながら、その詩人から離れて行つた。私も出来るだけその方から、そつぽを向いていた。

それからまた、私はその詩人と並んで歩き出しながら、いま会つたばかりの少女たちの名前を、それからそれへと、熱心に、しかし、何気なさそうに、聞いていた。今まで私によそよそしかつ

た野生の花が、その名前を私が知っただけで、急に向うから私に懐^{なづ}いてくるように、その少女たちも、その名前を私が知りさえすれば、向うから進んで、私に近づいて来たがりでもするかのよう
に。

そんなことのうちに三週間ばかり滞在した後、私は一人だけ先きに、その高原を立ち去った。

私が家に帰ると、私の母ははじめて彼女の本当の息子が帰って来たかのように幸福そうだった。私がすっかり昔のような元気の良い息子になっていたから。しかし私の元気がよかったのは、その高原で私の会ってきた多くの少女たちを魅するため、そして

そのためにのみ、早く有名な詩人になりたいという、子供らしい野心に燃えていたからだつた。母はそんな私の野心なんか気づかず、ただ私の中に蘇よみがえつた子供らしさの故に、夢中になつて私を愛した。

その高原から帰ると間もなく、私はT村からお前の兄たちの打つた一通の電報を受取つた。それは一種の暗号電報だつた。――
「ボンボンオクレ」

私は今度はなんの希望も抱いだかずに、ただ気弱さから、お前の兄たちの招待をことわり切れずに、T村を三たび訪れた。もうこれ

つきり恐らく一生見ることがないかも知れぬ、私の少年時の思い出に充^みちた、その村の海や、小さな流れや、牧場や、麦畑や、古い教会を、ちよつと一目でもいいから、もう一度見ておきたいような氣もしたから。それに矢張り、何んといつても、その後の前の様子が知りたかつたから。

私がいままではあんなにも美しく、まるで一つの大きな貝殻のように思ひなしていた、その海べの村が、いまは私の目に何んとも見すばらしく、狭苦しく見えることよ！ 嘗^{かつ}てはあんなにもあどけなく思っていた私の昔の恋人の、いまは何んと私の目には、一箇の、よそよそしい、偏屈な娘としてののみ映ることよ！……それから去年よりずっと顔色も悪くなり、瘦^やせこけている私の競争者

を見た時は、私はなんだか気の毒な気さえした。そうして私はますます彼を避けるようにした。彼は時々悲しげな目つきで私の方を見つめた。……私はそのもの云いたげな、しかし去年とはまるつきり異つた^{ちが}眼ざし^{まな}の中に、彼の苦痛を見抜いたように思つた。しかし私自身はと云えば、もうこれらの日が私の少年時の最後の日であるかのように思いなしていたせいか、至極快活に、お前の兄弟たちと遊び戯れることが出来た。

その呉服屋の息子は今年建てたばかりの小さな別荘に一人で暮らしていた。彼はその新しい別荘を、その夏お前たちの一家を迎えるために建てさせたらしかった。しかし彼の病気がそれを許さなかつた。お前たちは、去年の農家の離れに、女ばかりで暮らし

ていた。お前の兄たちと私だけが、その青年の家に泊りに行つた。

或る早朝だった。私は厠かわやにはいつていた。その小さな窓からは、井戸端いどばたの光景がまる見えになった。誰かが顔を洗いにきた。私が何気なくその窓から覗のぞいてみると、青年が悪い顔色をして歯みがを磨いていた。彼の口のまわりには血がすこし滲にじんでいた。彼はそれに気がつかないらしかった。私もそれが歯茎から出たものとかばかり思っていた。突然、彼がむせびながら、俯うつむ向きになった。そしてその流し場に、一ひとかたま塊りの血を吐いていた……

その日の午後、誰にもそのことを知らせずに、私は突然T村を

立ち去った。

エピロオグ

地震！ それは愛の秩序まで引っくり返すものと見える。

私は寄宿舎から、帽子もかぶらずに、草履ぞうりのまんま、私の家へ駈かけつけた。私の家はもう焼けていた。私は私の両親ゆくえの行方を知りようがなかった。ことによると其処そこに立退たちひいているかも知れないと思つて、父方の親類のある郊外のY村を指さして、避難者の群れにまじりながら、私はいつか裸足はだしになつて、歩いて行つた。

私はその避難者の群れの中に、はからずもお前たちの一家のも

のを見出した。私たちは昂奮こうふんして、痛いほど肩を叩たたきあつた。お前たちはすっかり歩き疲れていた。私はすぐ近くのY村まで行けば、一晩位はどうかなるだろうと云つて、お前たちを無理に引張つて行つた。

Y村では、野原のまん中に、大きな天幕が張られていた。焚火たきびがたかれていた。そうして夜更よふけから、炊たき出しがはじまつた。その時分になつても、私の両親はそこへ姿を見せなかった。しかし私は、そんな周囲の生き生きとした光景のおかげで、まるでお前たちとキャンプ生活でもしているかのように、ひとりでに心が浮き立つた。

私はお前たちと、その天幕の片隅かたすみに、一塊りに重なり合ひな

がら、横になった。寝返りを打つと、私の頭はかならず誰かの頭にぶつかった。そうして私たちは、いつまでも寝つかれなかった。ときおり、かなり大きな余震があつた。そうかと思うと、誰かが急に笑い出したような泣き方をした。……すこしうとうと眠つてから、ふと目をさますと、誰だか知らない、寝みだれた女の髪の毛が、私の頬ほおに触さわっているのに気がついた。私はゆめうつつに、そのうつすらしい香りかおをかいだ。その香りは、私の鼻先の髪の毛からというよりも、私の記憶の中から、うつすら浮んでくるように見えた。それは匂においのしないお前の匂いだ。太陽のにおいだ。麦藁帽子むぎわらのにおいだ。……私は眠ったふりをして、その髪の毛のなかに私の頬を埋めていた。お前はじつと動かずにいた。お前

も眠ったふりをしていたのか？

早朝、私の父の到着の知らせが私たちを目覚めさせた。私の母は私の父からはぐれていた。そうしていまだにその行方が分らなかった。私の家の近くの土手へ避難した者は、一人残らず川へ飛び込んだから、ことによるとその川に溺^{おほ}れているのかも知れない。

……

そういう父の悲しい物語を聞いているうち、私は漸^{ようや}くはつきり目をさましながら、いつのまにか、こっそり涙を流している自分に気がついた。しかしそれは私の母の死を悲しんでいるのではなかった。その悲しみだったなら、それは私^{わたし}がそのためにすぐこうして泣けるには、あまりに大き過ぎる！ 私^{わたし}はただ、目をさまし

て、ふと昨夜の、自分がもう愛していないと思つていたお前、お前の方でももう私を愛してはいまいと思つていたお前、そのお前との思いがけない、不思議な愛撫^{あいぶ}を思い出して、そのためにのみ私は泣いていたのだ……

その日の正午頃、お前たちは二台の荷馬車を借りて、みんなでその上に家畜のように乗り合つて、がたがた揺られながら、何処^{どこ}だか私の知らない田舎^{いなか}へ向つて、出発した。

私は村はずれまで、お前たちを見送りに行つた。荷馬車はひどい埃^{ほこ}りを上げた。それが私の目にはいりそうになった。私は目をつぶりながら、

「ああ、お前が私の方をふり向いているかどうか、誰か教えてく

れないかなあ……」

と、口の中でつぶやいていた。しかし自分自身でそれを確かめることはなんだか恐ろしように、もうとつくにその埃りが消えてしまってから、いつまでも、私は、そのまま目をつぶっていた。

青空文庫情報

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「日本國民」日本國民社

1932（昭和7）年9月号

初収単行本：「麥藁帽子」四季社

1933（昭和8）年12月5日

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

麦藁帽子

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>